

■（３２）活字が少しでも役立つならば！

東日本大震災で大きな被害を受けた三陸沿岸部。多くの新聞販売所も被災した。経営者や配達員が犠牲になった販売所も複数ある。岩手県大船渡市の夫婦は、自らも避難所暮らしを続けながら新聞の配達を続けている。見舞いに行った同僚から聞いた話だ。

避難所の夜の消灯は９時半。翌朝の朝刊の配達に向けた準備を夜遅く終えた夫婦は、ほかの避難者を起こさないようにそっと戻る。翌朝の朝刊配達はやい。周囲が目覚まさないように静かに作業場に向かう。読者も被災しているので、配る部数は減ってしまった。それでも毎朝、届け続けてようとしている。そんな話に記事を書く方も身が引き締まる。

本の流通会社に務める知人も言っていた。被災地の本屋から大量の注文が来ているそうだ。被災者からの「本が読みたい」という要望が、地元の本屋に相次いでいるという。避難所で周囲に迷惑をかけないで楽しめるのは、テレビよりも活字ということらしい。

被災地ではようやく今週、最も遅れていた学校で始業式があった。宮城県の避難所で「フアイト新聞」を発行していた子たちがいた。学校でも続けていて欲しいと願う（山）